

名古屋大学 文系 傾向と対策

1. 最低点

	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年	2025 年	2026 年
文学部	1422/2100(67.7%)	1347/2100(64.1%)	1387/2100(66.0%)	1399/2100(66.6%)	1491/2150(69.3%)	1451/2150(67.5%)
教育学部	1757/2700(65.1%)	1663/2700(61.6%)	1768/2700(65.5%)	1812/2700(67.1%)	1882/2750(68.4%)	1797/2750(65.3%)
法学部	1014/1500(67.6%)	968/1500(64.5%)	1023/1500(68.2%)	1044/1500(69.6%)	1099/1550(70.9%)	1068/1550(68.9%)
経済学部	1576/2400(65.7%)	1555/2400(64.8%)	1561/2400(65.0%)	1606/2400(66.9%)	1672/2450(68.2%)	1615/2450(65.9%)

2. 配点

文学部	共テ 950 点 国語 400 点 地歴 1 科目 200 点 数学 200 点 英語 400 点
教育学部	共テ 950 点 国語 600 点 数学 600 点 英語 600 点
法学部	共テ 950 点 数学 200 点 英語 200 点 小論文 200 点
経済学部	共テ 950 点 国語 500 点 数学 500 点 英語 500 点

3. 特筆すべき数学の出題範囲について

- ★数学 A の出題範囲は全てとなっています。
- ★数学 B の出題範囲は「数列」となっていて「統計的な推測」は出題されないようです。

4. 学習について

90 分で大問 3 つの構成となっています。公式集が配られるのが特徴的です。コーシー・シュワルツの不等式、点と平面の距離公式、ヘロンの公式等々あまり使わない公式までのっていて時折便利ではありますが、使うタイミングを知らなければあまり意味がありません。結局日々学習していればおおむね公式は覚えていると思いますので、あまり使うことはないのではと想像します。

どの大問も設問が付されているのが特徴的です。最近では難しいものも多く最後まで解ききるのは難しいものも多いです。最後以外はわりと解きやすいです。どの問題も設問の最後以外はきっちりとりに行くというスタイルでいるとよいでしょう。

確率が例年出題されるのが特徴的ですが、出題内容は幅広いです。コツコツ数えるもの、論理で攻めていくもの、数列を利用するもの、多岐にわたります。確率はやりにくい問題が多いので、学習の仕方を悩ませると思います。少なくとも基本的な数え方をおさえて半分は解くといったスタイルがいいでしょう。今後どうなるかは分かりませんが、今のところ最後まで解ける問題は少ないかと思います。

他の分野については幅広いです。3 問しかないのにも関わらず、いろいろな分野を組み合わせてきます。どの分野も要所をきっちりおさえる学習をしておきたいです。

参考書ルートとしては次のような流れになるでしょうか。

①『青チャート』（レベル 4 まで）『Focus Gold』（レベル 3 まで）『LEGEND』（レベル 3 まで）『数学 1・A 基礎問題精講』『数学 II・B+ベクトル基礎問題精講』『Super Quick I +A』『Super Quick II・B・C（ベクトル）』といった網羅系参考書をこなしましょう。例題が解けるようになることが目標です。数学が苦手である生徒さんに対しては『Super Quick』をおすすめします。

*時間のない受験生は『Super Quick』→『文系の数学 重要事項完全習得編』と学習するとよいでしょう。

②『大学への数学スタンダード演習』『文系の数学 実践力向上編』『理系数学の良問プラチカ 数学 I A II BC』といった問題集で演習を積むとよいでしょう。時間に余裕のある人は『文系数学の良問プラチカ 数学 I A II BC』『上級問題精講』まで取り組めると安定感が出てくるでしょう。

③『名古屋大学 文系数学 25 カ年』が電送教学舎から出版されています。そちらで過去問演習をするとよいでしょう。ただし全て解き切る必要はありません。難しい問題にはそれほど付き合わなくてよいでしょう。2021 年以降については以下に難易度の目安があります。A や B といったレベルをきっちり解けるようにしておきたいです。

数学は経験が大切です。テキストの問題を 1 つ 1 つ大切に、本番似た問題が出たら必ずとるぞという意気で学習していきましょう。

5. 過去の出題問題と難易度

過去に出題された分野と難易度を以下に示します。

A・・・完答必須です B・・・合格の明暗を分けそうです C・・・方針をとらえて部分点を得たいです D・・・難しいです。少しでも部分点がとれたら。 E・・・できなくても仕ないです

2021 年 目標 6 割 5 分

① 微積分、複素数と方程式 B

共通接線という話題ですが、相手が 2 次関数であれば、片方を接線公式で表現してもう一方に対しては $D = 0$ に持ち込むというのが王道です。接線が 2 本ということは t が 2 つということだからさらに $D > 0$ へという流れです。解と係数の関係、積分とその後続きますが、典型的処理の組み合わせであり完答を目指したい問題です。

② 対数、複素数と方程式 BC

名大でよく出る大小判断の問題が(1)でした。差をとり対数法則を用いるだけであるので、(1)はしっかりとりたいです。(2)は解と係数の関係の逆とグラフを用いる問題ですが、符号に気をつけなければならないのと(1)の利用などあり混乱した受験生は多いのではないかと想像します。

③ 確率 B

コツコツ場合分けしながら求めていくものです。設定をちゃんと理解していないと勘違いなど起こして大きな事故がおきそうな問題です。場合分けが漏れてしまったという受験生も多そうです。確率の求め方は平易であるので完答を目指したいところですが、、ミスがあっても仕方ないかなとも思います。

総評

突出して難しいものはなく、すべて基本の詰め合わせといった構成でした。1 と 2 で解と係数の関係が出てきました。複素数と方程式の分野もしっかりおさえられてなければなりませんね。

2022 年 目標 6 割 5 分

① 複素数と方程式、微分法 B

(1)は大丈夫でしょう。整式の剰余の問題では「まず商と余りをおいて立式」という基本スタイルが問われたのが(2)でした。恒等式を作り、係数比較、方程式の個数を数えるのにグラフの共有点に帰着という流れです。完答を目指したい問題です。

② 確率 BC

本年もコツコツやるタイプの確率でした。(1)ではあまり工夫が見られません。 c の値を固定しながら考えていくのが適切でしょう。(2)では $ab + 2c$ が奇数つまり ab が奇数でなければならないことをつかんで、あとは検証していくという形ですが、検証も大変です。 ab が奇数ということで部分点だけでも確保したいです。

③ 微積分、図形と方程式 B

(2)まではよくある問題でスムーズに解きたいです。(2)では「2 変数の不等式は領域で」という基本スタイルがとれたかどうかです。ここは差が出たように思います。法学部や経済学部受験生は完答したい問題です。

総評

昨年度と同様の難易度で突出して難しい問題はありませんでした。どれも差がちゃんと差が出るように作ってあります。コツコツ数える確率が連続で出ていることには注意が必要です。普段から排反にもれなく数えることに慣れておかねばなりません。

2023 年 目標 6 割

① 微分法 B

(2)まではスムーズに。(3)では a の値によって場合分けしていきますが、 $a = -1$ のときに極値をとる x がキレイではないので次数下げして極値を求めるという工夫が要るでしょう。計算力が問われています。 $a = 2$ と決まったあとにグラフを描くのに苦労した人も多いかもしれません。 $x = -1$ で交わり $x = 2$ で接しているかどうかが大きなポイントです。

② 図形の性質、相加相乗 B

大きく差がつきそうな問題です。はじめに相似に気付けば(2)までは楽にこなせるでしょう。ベクトルでやろうとする受験生も多そうです。それはそれでも悪くはないです。(3)の体積の和が表現できたかどうかのポイントです。どこを底面とし高さにするかはハッキリしていると思います。ビビらず取り組めたかどうかでしょう。本問は明暗を分けそうな問題です。

③ 確率 C

本年もコツコツやるタイプですが、結構きついでしょう。実験をしたりして状況をつかむほかはありません。あとは推移をしっかり追いかけて整理します。が、煩雑でやりきれた受験生は少ないでしょう。

総評

1 **2** が勝負でしょう。確率が年々やりにくくなっています。そろそろコツコツタイプはおさらばでしょうか。

2024 年 目標 6 割

1 複素数と方程式 AB

(2)までは大丈夫でしょう。(3)はそれまでの誘導にのって解答すればよいです。(3)がいきなり与えられたとしても、基本対称式 $p+q$ と pq を求めて解と係数の関係へという流れはとれてほしいです。いぜれにせよ完答したい問題でしょう。

2 2 次関数 B

こちらも誘導が丁寧で、それにのって解答を構成すればよいです。あまり特筆すべきところはありません。完答したい問題です。

3 確率 C

(1)は文字が入っていますが、位置だけ表せばよいので表現はできてほしいです。(2)以降、(1)をまずヒントにできたかどうかです。(1)で $a_n = 2n + r$ と表せるので、得点を得るのは $r = 2$ つまり裏が 2 回するときだけです。それが分かれば、(2)はそこまで難しくはありません。(3)はかなりきついです。表が 7 回、裏が 2 回と分かってもどういうときに 100 点となるかわかむのは難しいです。できた人はほとんどいないと思います。

総評

微積や図形の問題が出題されずいつもと違う雰囲気の年でした。**1** **2** は点数が稼ぎやすいはずですが、**3** は最後まで難しいですが(1)はとっておきたいです。(2)までできたら万歳でしょう。

2025 年 目標 7 割

1 2 次関数、積分法 BC

何をやっているのか分からないという受験生が多かったと思われます。(1)ではとりあえず p や q を解の公式で表現してしまえば、答えることができますが、具体的に表現しちゃえと思えた受験生はそこまで多くなさそうです。表現してしまえば、(2)は大丈夫でしょう。(3)もとりあえず積分しますが、領域が x 軸の下にあるのでマイナスをつけねばなりません。計算量も多く最後まで解けた受験生は少ないでしょう。(2)まで出来たら上出来です。

2 整数 B

因数分解して $a+b$ と $a-b$ の偶奇が一致するということを学習していれば全体的に難しくありません。(2)はこのことを用いないと厳しいでしょう。差がついた問題といえます。完答を目指したいです。

3 確率 BC

(2)の論証が難しいでしょう。なんとなく①③④⑥と②⑤に分ければいいということは直感的に分かりますが、それをどう式で示せばよいかが難しいです。(2)をとばして(3)をやりきってもよいでしょう。出来は悪そうです。

総評

全体的に難化しました。数学ではあまり差がつかなかったのではないかと想像します。

2026 年 目標 6 割

1 微分法、三角関数、図形と方程式 BC

(4)まで解き切るのは難しいでしょう。(2)まではスムーズにいきたいです。(3)では $\tan \theta$ を問われているので傾きを用いて加法定理にもちこみます。ここも解ききりたいです。(4)は $\tan \theta$ が $\theta = \frac{\pi}{2}$ で定義できないなど多少気を遣うところもあるので、きっちり議論できた受験生は多くないと思われます。(3)までは解きたいです。

2 整数、場合の数 BC

これも最後まで厳しいでしょう。互いに素な 3 つの数にふりわけるとというのが主題です。(2)までは何とかがんばってほしいです。(3)は抽象的で予想ができてでも論証は難しいでしょう。

3 確率、数列 BC

例年通り確率が出題されましたが、これも最後まで難しいでしょう。(1)では実験がてら推移を追いかけます。(2)(3)で漸化式を作りますが、ここまでがんばりたいです。最後は数学的帰納法でやろうというスタイルがとれたか、計算をやりきれたかが問われますがやりきれた受験生は多くなさそうです。

総評

本年はどれも高級でした。一問も完答せずに合格した受験生も結構いるのではないのでしょうか。